106

春日町（かすがちょう）遺跡

（鹿児島市春日町５番地）

位置と環境

鹿児島の市街地は姶良カルデラが爆発したあと，そのカルデラの崖下に堆積し，沖積低地にできた低地の町である。吉野台地から流れ出して鹿児島市街の北部地域を形成した稲荷川の下流右岸の自然堤防状の微高地にできた，標高約８m，南州神社のある台地東麓から東へのびる自然堤防状の微高地東端にある。周辺には若宮神社・大竜小学校など縄文時代後期を主とする遺跡がある。

調査の経緯

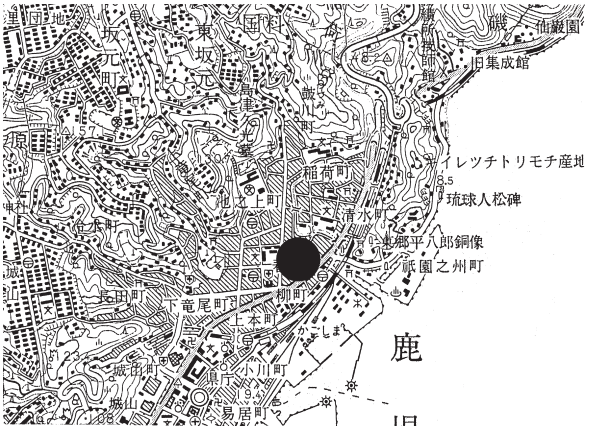
昭和27年（1952）に発見されてから翌年まで３次にわたって，河口貞徳らが発掘調査をおこなった。

遺構と遺物

遺構として砂岩を主に少量の軽石を含んだ４㎡位の範囲に広がる集石があったが，性格は不明である。

遺物包含層は上下二層からなる。基盤の沖積砂層からその上の黒色砂層にかけて，縄文時代中期の春日式・並木式・阿高式・岩崎下層式土器が出土した。上層では後期の指宿式・市来式・草野式土器が層序をなして出土しているほか，地元の縄文時代後期の土器と共伴するように，瀬戸内の福田ＫⅡ式土器の影響を受けた磨消縄文土器，北九州の鐘崎式土器，中九州の西平式土器などが出土して，後期になると瀬戸内，北九州，中九州の文化がきわだって波及している。上層の上部では市来式・鐘崎式・西平式土器が出土している。市来式土器は平縁口縁のものと山形隆起のものとがあり，口径が30㎝内外ある。口縁部断面は三角形を呈し，その隆起部に貝殻縁部の圧痕文，ヘラによる凹縁を施しており，隆起部の下に文様を施すものもある。底は平底で，網代底が多く，木の葉圧痕を有するものもある。台付の浅鉢もある。鐘崎式土器は口径が30～40㎝で広口の鉄鉢形である。黒色研磨土器で，肩部から胴部へかけて磨消縄文がみられる。西平式土器は口縁部が外反し，さらに内側へくの字状に屈曲する研磨土 器である。鐘崎式・西平式土器とも出土量は少ない。

上層の下部では指宿式土器・磨消縄文土器が出ている。指宿式土器の口縁部は平坦なものと山形隆起のものとがあり，上のほうがしまった深鉢形土器だが，頸部がしまったものもある。文様は細い二並行曲線文，または直線文を上半部に施しており，渦文となるものも多い。二並行線の間には二枚貝圧痕によって疑縄文を施したものがある。山形隆起の内側にも文様を施している。頸部がしまったもののなかには，口縁部から頸部にかけて橋状把手を施すものもある。平底で，網代底となるものも多い。磨消縄文土器は胴部のやや張った粗質土器で，口縁部に山形の隆起がある。二並行曲線文の間に縄文を施しているが，出土量はきわめて少ない。



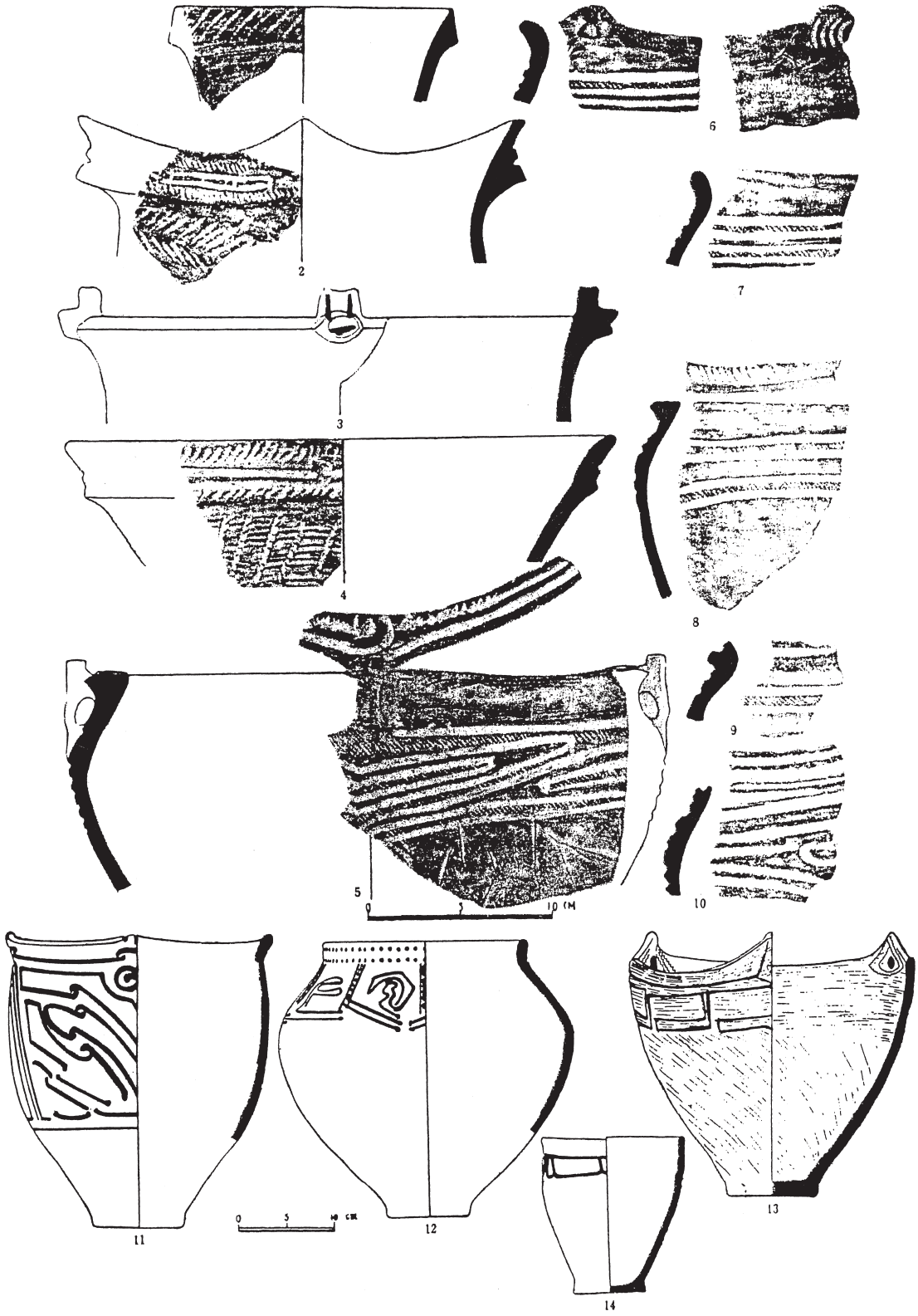
第１図　春日町遺跡の位置

上層と下層の間に岩崎上層式土器・阿高式土器が出土しているが，いずれも量は少ない。岩崎上層式土器は口縁部に凹線文を施した深鉢である。阿高式土器は口縁部から胴部へかけて太い曲線の凹線文を施した深鉢で，滑石を混じたもの，隆起口縁のあるものもある。

下層の上部で並木式土器が出土する。滑石をまぜており，浅い太形の凹線を施しているが，凹線間に半載竹管やヘラなどで連続爪形文を施す。

下層から春日式土器が出土している。円筒状の胴部から外反する口縁部へいくものと，キャリパー状口縁になるものがあり，底はあげ底である。粘土紐を貼りつけ，渦巻き文・曲線文等をなすが，この隆起部に連点を施したものもある。沈刻線文もある。

これらの出土状況から春日式―並木式―阿高式―岩崎上層式―指宿式―市来式という編年がたどれた。この遺跡がもっとも盛んであったのは後期で指宿式



第２図　上層出土の土器

と市来式土器期の時代である。土器の出土量が多い。

石器では磨製石斧，石錘，叩き石，石匙，石鏃などがあるが，石鏃の出土量は少ない。石斧は砂岩製のものが5点あるが，一面がくぼんだ片刃のものや，乳棒状のものがある。注目されるのは舟形の軽石製品で，市来式に伴うものと推定され，この時期には丸木舟をつくり航海していたとおもわれる。有孔円盤形のもの，片面をすったものなどほかにも軽石製品は多い。

このあたりは上町と呼ばれているが，江戸時代の凝灰岩製上水道管も出土している。

特徴

縄文時代前期から後期にいたる複合遺跡である。

縄文時代中期の土器である春日式土器の標識遺跡である。

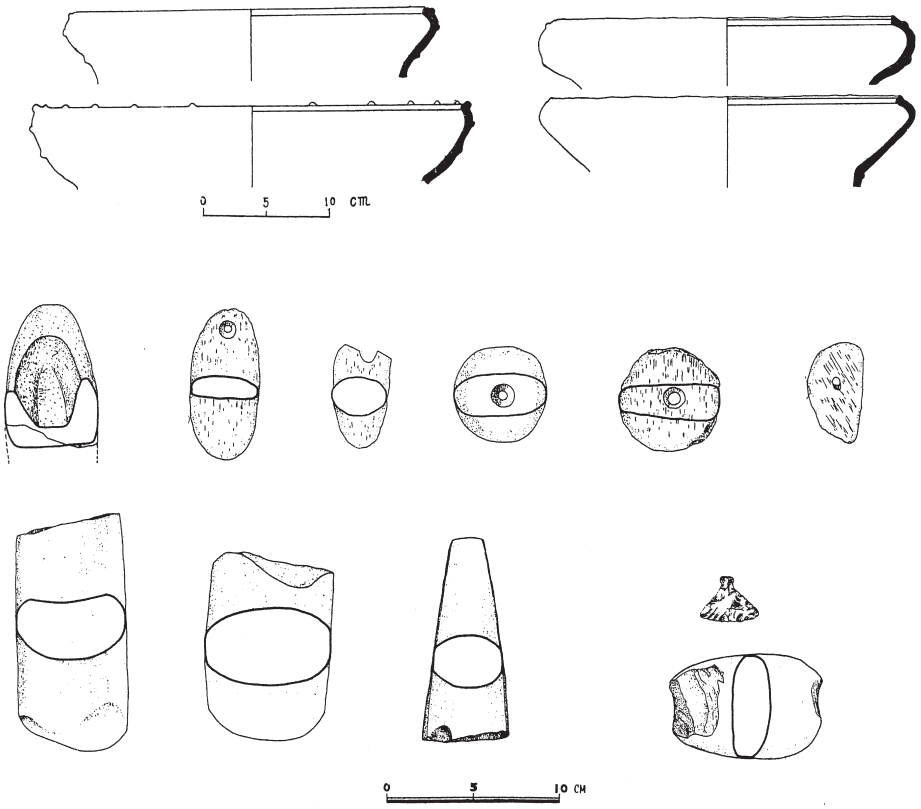
資料の所在

出土遺物は，河口貞徳宅に保管されている。

参考文献

河口貞徳・河野治雄1955「鹿児島市春日町遺跡発掘調査報告」『鹿児島県考古学会紀要』第4号鹿児島県考古学会

（河口貞徳）



第3図　春日式土器（上）と軽石製品・石器